

論文審査結果の要旨

平成 27 年 12 月 10 日 (木) 午後 2 時 30 分から 4 時まで、文学部会議室において公開審査会が開かれ、本論文について概要の発表と論文内容についての質疑応答が行われた。主な論点は以下の通りである。

1. 研究の方向性

談話研究は日本語学においてまだ新しい領域であり、談話データの構築もそれを用いた研究も端緒についたばかりとあってよい。E. Goffman らの相互行為に関する研究と従来の日本語構文研究の成果に基づきながら、談話レベルで特定の言語表現の用法を分析する本論文は、日本語学の新しい潮流を示す意欲的な研究として注目される。ただ従来の構文レベルの日本語研究をふまえたところが大きく、本論文が談話の分析によって新たに明らかにした部分がみえにくいとの指摘がなされた。筆者が談話に注目して解明しようとするのが、ダイナミックに捉えた言語表現のありようか、言語を通して見た相互行為のありようかを、より明確に打ち出すことが望まれる。

2. 分析対象

本論文の独創的な点の一つは、構文研究では捉えきれない言語の創造的な意味や機能を、実際の談話データを用いて解明することにある。それだけに分析対象データの質が重要と思われるが、第 2 章から第 4 章で扱われた結婚披露宴の司会や政治家の演説は、ある程度台本や原稿に基づくもので自然な発話とはいいがたいこと、第 5 章から第 7 章で扱われた会話コーパスには異なる話者による複数の会話が含まれており、会話によって話者の年齢・出身地、日本語学習者の母語・日本語学習歴などによりかなり違いがあることが指摘された。これまでに公開されている日本語談話データはまだ少なく、その構築は学界全体の課題であるが、テーマに最適なデータ選択と各データの特色を生かした分析が求められよう。

3. 文字化されにくい要素の扱い

本論文では文字化された言語要素に焦点を絞っており、文字化されにくい要素については記述しない態度をとっているが、第 2 章から第 7 章における具体的な言語表現においては、イントネーションやあいづち、非言語的な視線や体の向きなども排除しがたい要素と考えられる。このように言語学のみならず、心理学などの周辺諸科学の知見を生かしていく取り組みの必要性もあろう。

4. 対照言語学的な視点

第 5 章から第 7 章の対話研究において、先行研究に基づき「共話」が日本語の特徴であるという指摘がなされているが、他言語についての記述はなく、論

文全体を通してみても他言語への言及は少ない。筆者が対照言語学的な方向を目指すのでないとしても、他言語へ視野を広げることにより、日本語談話の特徴がより明らかになるだろう。

本論文は、近年英語を中心に進められてきた会話分析の理論と現代日本語研究の具体的成果とを融合させた、相互行為としてみた日本語談話に関する先駆的研究といえる。従来の研究領域の枠に収まらないだけに、方向性や方法に関する課題は多いが、新たな視点からの日本語研究の可能性を示した、研究史上有意義なものである。

よって、本委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値することを認める。